

入社してちょうど二か月が経った頃のことだ。

私、中林裕里がやらかしたのは重要な取引先への提案書だった。

上司から『今日中に先方に送っておくように』と言われていたのに添付ファイルを間違えた。しかも気づいたのは送信してから三十分後で、先方からすでに「内容が違うようですが」という丁寧な返信が来ていた。

頭が真っ白になった。どうしよう、どうしよう、と思いながらモニターを見つめて固まっていると、隣からすっと手が伸びてきた。

「貸して」

高城泰玄くんだ。同じ二十二歳の同期で、席は私の隣。入社したばかりだというのに仕事が早く、滅多に慌てない。ほかの人が見落とすような小さな変化にもすぐ気づく人だった。

有無を言わず私のキーボードを操作して、素早く謝罪と訂正の文面を

作り、正しいファイルを添付して送信する。それだけで終わらず、上司が帰宅する前に事情まで説明してくれていた。おかげで翌朝、私は嚴重注意だけで済んだ。私が間違えたファイルも、送信した時刻も、高城くんは私より正確に把握していた。

（またやっちゃった……）

終業後、私は自席でぼんやりと反省していた。また迷惑をかけてしまった。

入社してからずっとそうだ。同期の中で自分だけ何もできない気がして、毎日少しずつ自信が削れていく。フロアには残業している社員が数人いて、蛍光灯の白い光が静まり返った空間に広がっている。

「中林さん」

声がして顔を上げると高城くんが私のデスクの前に立っていた。

「高城くん……」

ネクタイをゆるめた姿が昼間より少しだけ近くに感じる。

「……今日は本当にありがとうございました。本当にすみませんでした……」

高城くんは私の隣の椅子を引いて腰を下ろす。そのまま私を見た。ただ、静かに見ていた。

「今月だけで何回カバーしたと思う？」

「……す、すみません」

「五回だよ」

返す言葉がなかった。俯いて机の端を見つめる。

「ちゃんと数えてたんですか……？」

「中林さんのことは、よく見てるから」

さらりと言われ、顔を上げる。高城くんは冗談を言った様子もなく、私
がどんな反応をするのか待つように目を細めた。

「別に責めてるわけじゃない」

「……本当に迷惑かけてるのはわかってます。いつも私だけ……」

「だったら、その分俺の言うことを聞いてくれる？」

最初、その言葉の意味がわからなかった。顔を上げると高城くんはまっすぐに私を見ていた。

「……それって」

「ヤラせて」

「……っ!？」

「な、なんで、私なんですか……？」

「そんなに怯えなくていい♡俺はただ、中林さんのいろんな顔が見たいだけだから♡」

「いろんな、顔……？」

「仕事中はいつも困った顔か、謝ってる顔ばかりだろ。俺しか知らない顔も見せてよ」

「嫌なら嫌でいいけど、次からミスのカバーはしないよ」